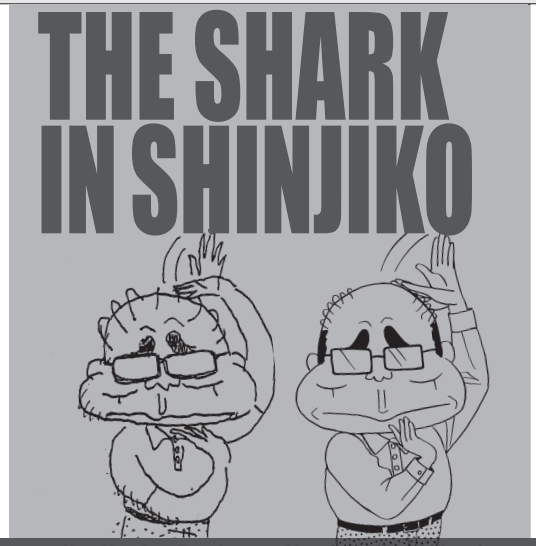
南極探検隊



宍道湖鮫（しんじこざめ）

短編馬鹿小説

9784087712742

1920093019002

ISBN978-4-08-771274-2
C0093 ¥1900E

KUPPA NOVELS　子分社

短編馬鹿小説

宍道湖鮫（しんじこざめ）

京極（きょうごく）メキシコ

古屋兎丸（ふるやうさまる）イラスト

京極（きょうごく）メキシコ ⑲

京極メキシコ（きょうごく・めきしこ）二十世紀に行われた「いいかげんなペンネームコンテスト」業界の部・優秀作品。ちなみに発案者が翻訳家の大森望さんであることは秘密のはずなのに中野坂上近辺では有名と伝えられる。

大沢在昌
『新宿鮫』
一九九〇年／光文社刊

大沢在昌先生の大人気シリーズに似ている？　全然違いますよね。無関係ですが痛いッごめんなさいッ。特殊警棒構えたりしないでください。これ、シリーズ6作目の〈氷舞〉完成記念で書いたんですよ、たしか痛たたたた。許してえ。もうしませんから。事務所の便所掃除しますからあ。

1

ウソじゃないってゆうかァ、ホントだよって感じでェ。なんかもうマジィって思ったしィ。でェ、やっぱり慌てちゃったし。なんてゆうかァ、こう、超タルいって話でェ。遥なんかボート降りて走っちゃうしィ。そう。逃げ入ってたってゆうか。

え？　え？　そー。遥ってば超トロくってェ、脚なんかこんな太くって。そー。転んだよ。望？　望は身軽だから転ばないよ。え？　うん走った。だってェあんなの見たことないし。怖いとかいうのダサダサだよねー。怖いとかって、なんか、馬鹿っぽいじゃーん。そうでもないの？　そう？　ならいいけどォ。

ウン。いたよー。泳いでたー。サカナ？　サカナじゃないよ。あんなサカナいないじゃん。サカナって小さいっしょ？　こーんぐらいじゃん。あ、クジラとかおっきいか。え？　クジラはサカナじゃないの。じゃあペンギンは？　ペンギン、トリ？　そうなの？　だってトドとかぁ、なんかいるじゃん。あーいうのみんな一緒じゃん。アシカとか。オットセイだっけ？　でも——ウソ、あれってばトリじゃないじゃん。ペンギンはトリ？　ふうん。でもそんなのどうでもいいし。でも見間違いとかじゃなかったよ。絶対。

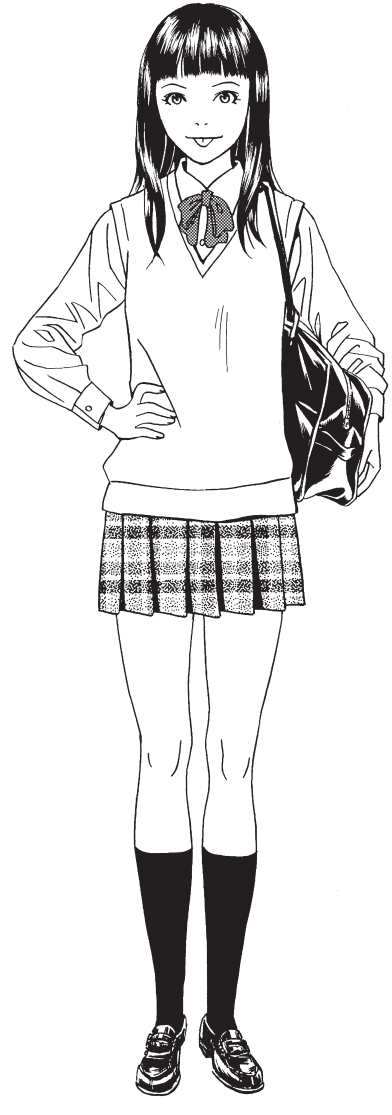
絶対だって。なァにィ？　望って、ウソなんかゆわないしィ。えー、信じないのォ？　なんかムカつく。そういうの。

やぁだ。もう話さないッ。

なにそれ？　お礼？　やだもん。お金とかの問題じゃないと思うし。望、別にお金なんか欲しくないし。お金持ちだもんうちン家。

いらないよ。い・り・ま・せ・ん。なにー。すっげーやだ。なんか魂胆とかありそう。え？　信じないよ。オヤジとか、みんなやらしいじゃん。謝礼とか出してやらしー。ゲロゲロ。死にそー。

あー。泣いたー。え？　いいよ。そんな謝るなら教えてあげるよ。なんかおじさん超卑屈じゃん。Mなの？



へー。そー。そうゆうのMってゆうんじゃん。

ま、いいか。あのね、その辺だよ。その、なんかあるじゃんボートとか。その先の方。そう。

深さ？　知らないよーそんなこと。湖って深さとか色々あるの？　ふーん。じゃあ深いんじゃない。

そうだよ。だって彼氏とかいないし。そう。遥とふたりで乗った。アヒルボート。足で漕ぐヤツ。

うん。向こうの方から来たよ。鮫？　鮫ってどんなんだっけ？　ジョーズ？　なにそれ。

バンドぉ？　知らなーい。でもサカナじゃないよう。違うの。ふん。やっぱり信じてないんじゃん。

いーよーだ。サカナじゃないんだもん。だってサカナは首ないじゃん。首あったもん。超長いって感じの。何かって？　そう。あ・れ・は――。

2

――U・M・A。

少女はそう言って、ぴんと伸ばした人差し指で空中にローマ字を書いた。

UMA。未知動物の略称である。

――そういう言葉は知っているんだな。

赤垣廉太郎は感心する。そして視線を少女の顔に戻す。

まるで古屋兎丸が描くような美少女である。記号化された美少女イラストと寸分違わぬそのまんま美少女顔だ。何といっても――女子高校生である。

廉太郎も若くはないし、商売柄女子高校生との接点などはない。まったくない。廉太郎は一応小説家である。ジャンル的には冒険小説に分類されるものを書いている。まあ女子高校生は酒場で暴れたりヤクザを殴ったりあまりしないし、ゲリラにもならなければバズーカもほとんど撃たない。廉太郎の生活圏、取材先には棲息していない生物である。だから廉太郎は平素、女子高校生など見慣れていない。

そんな廉太郎あたりの印象だと、女子高校生などはみんなすれっからしのコギャル（死語）になってしまうのだ。まあ、最近は激減しているのだろうけれど、ヤマンバだの汚ギャルだの、インパクトの強いキャラが多かった所為だろう。

だから廉太郎にとって目の前の少女の容貌は新鮮だったのだ。まず、髪が茶色くない。顔も茶色くない。スカートは短いが眉は細くないし頭に花も咲いていない。ソックスは濃紺だったし伸び切ってもいなかった。いや、これは別に普通なのだが、廉太郎の脳内女子高校生の容姿とは掛け離れていたのである。それでもって、

――か、かわいい。

他に言葉が浮かばない。

こんな可愛い娘が嘘を吐くだろうか、吐かないよなァ、吐かない吐くまいよし信じよう――。

そう思ってから廉太郎は首を振った。

――外見に惑わされてはいけない。

可愛いからといって嘘を吐かないなんてことはないのだ。それはもてない男の、いやさオッサンの願望に過ぎない。

何よりまず、この娘は無知である。

鯨って魚じゃないのォ――辺りまでは廉太郎もまだ許す。しかし、しかしである。この娘はペンギンと胡猶や海驢の区別がつかないらしいのだ。鯨は、まあ幼い子供等から見れば魚類なのだろう。しかしペンギンは幼児が見たって鳥類だと思う。

――だが。待てよ。

そうはいってもペンギンは飛ばないし、おまけに水中を魚のように泳ぐ。解剖学的な分類を無視するなら胡猶や海驢に近いといえば近い。その昔、生物学がまだ博物学だった頃は、水鳥も魚に分類されていたというような話も聞くし、一概に無知と断定するのはどうかとも思う。そもそもそんなこと知らなくたって今の世の中全然困ることはない。ペンギンの生物学的分類を知らずともワンセグは観られるし写メも送れるではないか。

もしかしたら最近の女子高校生はみーんな、そんなこと知らないのかもしれない。きっと知らないんだ。知らないに違いないいやさ知るまい。そうさこの娘が特別馬鹿な訳じゃないんだ。そうなのさこの娘は馬鹿じゃない――。

――それも、願望だよな。

願望なのである。オッサンの。

今日日は小学生だって専門家も顔負けの生物学的知識を蓄えているのだ。下手なことを口走ると、だから大人は無知だとか言われてしまうのである。実際廉太郎は、子供の頃学習した恐竜の知識を披瀝して小学生に散々嘲笑われたことがあるのだ。その分野では、ここ二十年くらいの間に定説だの常識だのがすっかり覆ってしまっていたのである。

そもそも、世の中の女子高校生は皆コギャル（死語）だと思っていたというその時点で、もう無知なのは廉太郎の方であるということは確定しているも同然――ではないか。

大体そのコギャル（死語）の認識からして間違っていたのだろうと、廉太郎は今にして思う。

コギャル（死語）は皆馬鹿だというのは紛う方なき偏見である。コギャル（死語）にだって賢い娘は大勢いたのだろう。毛が茶色くたって援助交際してたって、風呂に入らなかろうがアイラインをマジックで描いてしまおうが、ペンギンと海生哺乳類の区別くらいついたのではあるまいか。ついたに違いないじゃないか。高校生なんだし。

高校生なんだから中学生よりは賢いのだ。高等学校は義務教育じゃないのだし、つまり受験だってしているんだし、何と言っても高等な学校じゃないか高校は。

そうすると、この娘はやっぱり――かなり――。

――かわいい。

ああ。

どーしても顔を見ると判断力が鈍ってしまう。そんな彼なのであった。

廉太郎はまた下を向いた。

「あ、の」

「あ。その。ええと」

「どうかしたですかー。おじさん♡」

声も。

――声も可愛いじゃないか。

もうどうしようもないじゃないか。

「いやだからそのあの」

「そのさァ、大盛さんさ。ええと、その遥ちゃんとかいうのはお友達な訳？――」

見兼ねたのだろう。廉太郎の横でずっと腕組みをして黙っていた椎塚有美子が冷ややかに質問した。

見れば相当に苛ついているようである。

廉太郎は首を竦めた。

「その遥って娘も一緒に見た訳でしょ？　その動物を――」

「友達ってゆうかぁ」

そう言ってから少女――大盛望は愛らしく小首を傾げた。

「なんてゆうかァ、そう。あの娘、引き立て役ってゆうかぁ。遥って可愛くないしィ」

あーあーそうですかそうですか――と、実に投げ遣りに言って、有美子は脚を高く振り上げて組み直した。

有美子は気が短い。廉太郎は気が弱い。望が廉太郎の態度を見て卑屈だマゾだと言ったのも、多分横に有美子がいたからなのである。廉太郎は有美子の前ではどうにも萎縮してしまうのだ。

有美子は某エンタテインメント系文芸誌の敏腕編集者で、廉太郎は彼女の雑誌に書かせて貰っている駆け出しの小説家なのである。

有美子が顔を向けた。

目つきが鋭い。

「廉ちゃん」

「はい」

「はいじゃないでしょう。どうなのよ」

「どうというと」

「この娘の話よ。信憑 性あり？」

「さあ」

そんなこと尋かれても困る。

有美子は眼を細め頬を引き攣らせて、ゆっくりと望を見た。

「その、遥ちゃんとかいうあんたより可愛くない娘をここに連れて来てくんない。その可愛くない娘にも話聞きたいのよ」

「遥って、トロいし超馬鹿ですよう」

「あのねー」

お前に言われたくないわい、の部分を有美子は呑み込んだようだった。望は半ば痙攣している有美子の様子にまったく気がつかないようで、その辺にいるから呼んで来まーす——と鈴を転がすような声で言って席を立ち、ぺこりと礼をして部屋を出た。

——仕種が。

あの仕種がたまらん。

「なぁにぃよォ。廉ちゃんってばロリ？」

「は」

そうかもしれない。廉太郎は自分の嗜好を改めて認識した。有美子はかあーッとオヤジが痰でも吐くような声を出してから、

「しッかたがねー」

と言った。

「ロリコンの冒険小説家かい。恰好悪ゥ」

「そ、そうっすか」

「いや赤垣を責めては可哀想だよ椎塚君」

のっそりと出て来たのは背後に控えていた自称心霊学の大家・中大岡百 太郎教授である。

「あの娘を見れば大抵の男はほれ、こう鼻の下がびろんと。君あたりとは齢が」

「黙れ」

有美子は立ち上がる。

「あたしは帰る。お前ら勝手にやれ」

「勝手にやれとは何だね。私は多忙なところわざわざアドバイザーとして乞われて来ているのだよ。そもそも君が帰ってしまったら、豪勢なホテル代や豪華な夕食代や帰りの飛行機代は誰が出すのかね。この貧乏作家が自腹を切るとは思えんが」

「あのねェ。中大岡さん。ハッキリ言っておきますけどね、だァれもあんたなんか呼んでないの。大体あんた心霊写真の鑑定家じゃなかったの？　いつから怪獣評論家になった訳？」

「馬鹿なことを言う女だな君も。私は超常現象研究家なのだ。心霊写真の鑑定なんかはその多種多彩な研究のほぉんの一部分でしかないのだ。もちろんUMAだって研究対象なのだよ。いいや、寧ろその道のオーソリティとして我が国では第一人者を自任しておる」

「あーそー」

有美子は棒読みでそう言ってドアのノブに手を掛けた。

有美子が怒るのも無理はないのだ。中大岡は乞われて来たようなことを言っているが、実のところこの間抜けな企画を提案したのは中大岡自身なのである。

その間抜けな企画とは——。

島根県某所の知られざる湖に棲息する謎の水棲巨大生物を捕獲せよ！

間抜けである。間抜け過ぎる。

間抜けである上に、およそ文芸誌には関係のない企画である。それもそのはず、これは元々テレビ向けの企画だったのだ。中大岡監修のいわゆる秘境探険モノである。どこぞから間抜けなネタを仕入れた中大岡は、早速企画書をでっち上げて各局を回ったらしい。

しかし、ネス湖だのニューギニアだのテレ湖だのと違って、何といっても——島根県である。

いや、誤解がないように断っておくが、この見解は別に島根県を差別した見解という訳ではない。福島県だって岐阜県だって同じことである。

いや、だから別に福島や岐阜を蔑視しているのでもないのだ。それは岡山だって同じだし、千住でも川崎でも同じことである。

と言うか戸越でも三戸でも同じなのである。船橋だって登別だって小倉だって、まあいちいち挙げていられないので簡単に言うなら、つまり国内ならば皆同じ、ということである。

今や日本に秘境はないのだ。

コンビニまで歩いて十分、水面には空き缶や生ゴミが漂い、ほとりにはテレクラのチラシを張りまくったバス停が立っている溜め池のような湖に、古代の首長竜はいない。いや、いてほしくない。いやいや、いては駄目である。

もしいたとしても黙殺するべきである。

もちろん海外の事情とても似たり寄ったりではある。人跡未踏の密林風景も、ほんのちょっとカメラをパンすればインテリジェントビルが映ったりする訳だし、異様な風体の現地の呪術師なんかも、撮影が終るや否やアロハにサングラス姿でクアーズをグビグビ飲んでいたりするのだ。

これらは俗にいうヤラセとはちょっと違う。要するに、カメラマンはより効果的な画を狙って撮っているに過ぎない。ベストアングルを選択するなら余計なモノは映らなくなる——というだけである。

呪術師だってスタッフが頼んでやらせた訳ではなく、通常そういうライフスタイルなのだとしたらこれは仕方がなかろう。アフリカの呪術師だとて、それは営業でやっている訳だし。

但しロケ先が海外の場合、視聴者にそうした状況は判らない。予想くらいはできるだろうが断言できる者はごく僅かである。

でも国内の場合は遥かに多くの視聴者が断言できてしまうのである。いくら神秘的な画作りをしたところで、こりゃあ裏の用水路だっぺ——となればそれまでなのだ。

それに加えて出演者の問題もある。

例えば人気タレントや有名な学者なんかが好んでそういう番組に出演するのは、ロケ先が海外——しかも珍しい場所——だからなのではなかろうか。廉太郎はそう思う。

ギャラの問題もある。例えば大規模なニュージーランドロケが組めるのであれば、それなりに予算も潤沢にあることになる訳であるが、それが多摩川ロケ日帰りとなると推して知るべしということになるし、その場合出演するタレントのランクも推して知るべしということになるのである。

結局——そうした番組の場合、企画自体の凄さなどよりも、寧ろできるだけ物凄い画の撮れる海外の秘境＋見慣れたタレントの組み合わせ、というようなシチュエーションこそが視聴率を左右するのだろう。廉太郎はそう考える。

中大岡の企画のメリットは予算がかからないというたった一点に集約される。売りは、安上がりというだけなのである。

その割りに、それ程アクセスが良くない。と言うか無茶苦茶悪いのだが。

それでも——ネタがしっかりしているならまだ良かっただろう。

結局はそこに至るのである。

小ネタであっても、現地のテレビ局なり制作プロダクションなりが優れたノンフィクションを作る場合もあるにはある。その場合はそう予算をかける必要もないだろう。しかし番組的には優れていたとしても地味は地味だし、視聴率が稼げるかといえば疑わしい。当たる場合は余程の大ネタでなくてはなるまい。

——でも。

そもそも今回のネタはあからさまに、誰が見たってガセである。幼稚園児に意見を求めたってウソだと言うに決まっている。屋台でくだを捲いているどっかのおっさんでさえダメ出しするに決まっているのだ。

ノツボだかドブだか判らぬような小さな沼に首長竜がいる訳がない。否、いてはいけない。

当たり前だが中大岡のプレゼンは各局に足蹴にされ、すべてのプロダクションに無視された。そして企画は頓挫しかけたらしい。

だがそこは転んでもただでは起きぬ百戦錬磨のオカルト親爺である。なんと、企画をそっくりそのまま雑誌に転用したのである。

だが。今のご時世、おおっぴらにオカルト系の話を取り上げる雑誌も少ないのである。一時に比べて緩くなりはしたが、それでもオカルトアレルギーはまだまだ根強い。それにも増して雑誌自体が売れないのだから、これは厳しい。一般誌は元より、オカルト専門誌だって簡単には喰いついてこなかったようである。いや、専門誌の場合、餅は餅屋——そこは流石に心得たもので、ネタの善し悪しなど一目瞭然だったのであろう。

オカルト度が強ければ強い程、より信憑性の高い企画を求めているのが現状なのである。しかし、その辺の事情は元々オカルト雑誌で頭角を現した中大岡教授、十二分に承知していたらしい。こともあろうに、モノ凄い裏技を使って来たのである。

——だったら、小説にしませんか。

もう何をかいわんや——であろう。

日本の秘境に潜む謎のUMA、その調査から捕獲に至るまでを綿密に取材し、グラビア付きのノンフィクションノベルに仕立て上げて短期集中連載しませう——というのが今回の企画である。

小説誌がそんな企画買う訳がない——と思ったら大間違いだった。有美子の上司である松平（まつだいら）編集長は、驚いたことに、本当に驚いたことに、もうひとつおまけに驚いたことに、喜んで話に乗っちゃったのだった。

聞けば松平という人は筋金入り、大のUMAマニアだったのだそうだ。何しろ四十六にして独身のその訳は、いずれヒマラヤだかロッキー山脈だかに登り、ビッグフットだかイエティだかを捕獲して、見事添い遂げるためである——という噂である。

——雪男の牝（メス）と。

なんか凄い変だぞ。雪男の牝。

そうして。

オカルトライター上がりという因果な経歴を持つ廉太郎に白羽の矢が立ったのだった。

嫌だった。

凄く嫌だった。

でも断れなかった。

廉太郎は気が弱いのだ。気が弱いからこそ、何かあるとすぐ相手をぶん殴っちゃうような粗暴な主人公が書けるのだ。その上度胸もない。もう少し度胸があれば冒険小説など書かずに冒険していたことだろう。

——それなのに。

何だか、島帰りであることを理由に脅されて無理矢理悪い商人の企（たくら）み事に荷担させられてしまう江戸の職人みたいな気分だった。廉太郎の脳内では、二の腕に『サ』とか太い二本線とか、そういう入れ墨が施されているのであった。

——中々過去は消せないもんなんだ。

そう。そんな訳で。

廉太郎が引き受けてしまったので、芋ヅル式に担当編集者の有美子が担ぎ出されることになったという訳である。

有美子は、何度もいうが気が短い。気が短い上に凶暴である。その上強い。触ると折れそうな程痩（や）せている癖に、その細腕から繰り出されるパンチは強力である。加えて執念深くて計算高くてカラオケが好きである。関係ないが。

だから怒っても当然なのだ。

何だか不必要にぐだぐだ長い説明だったような気がするが、そういう訳で限界を迎えた有美子は席を立ってドアノブに手を掛けたという訳である。

廉太郎には止める勇気も元気もない。

「——あたしは去るから。勝手にやって」

と、有美子が言ったその時である。

3

「何よこれ！」

「怪獣だろう」

「かい——ぢう——って、言えば、まあ——そうよねえ。どうかしら廉ちゃん」

「何故赤垣に尋く。専門は私だ」

中大岡百太郎は、DVDの小型モニターを確認すべく廉太郎の前に出た。中大岡は頭も顔も長い。髪型も凄い。後ろからだと何も見えない。

「ううん。しかし——信じられんことだ」

信じられん——と中大岡は言った。

しかも首を捻（ひね）っている。

廉太郎は少しだけ興奮している。

普段の中大岡とは違う。このオカルト親爺の手にかかったなら、例えばレンズのゴミが浮遊霊に、木の葉が地縛霊に、隣の親爺が背後霊に、あっという間に、それはもう凄い速さで即断される。カワウソだろうがラッコだろうがあっという間に、目にも止まらぬ速さでモケーレ・ムベンベだのシーサーペントだのに早変わりである。毛深い男は全部サスカッチか野人だし、猫は空を飛び猿には角（つの）が生えて、この世は一気に怪獣天国である。

その中大岡が首を捻っている。

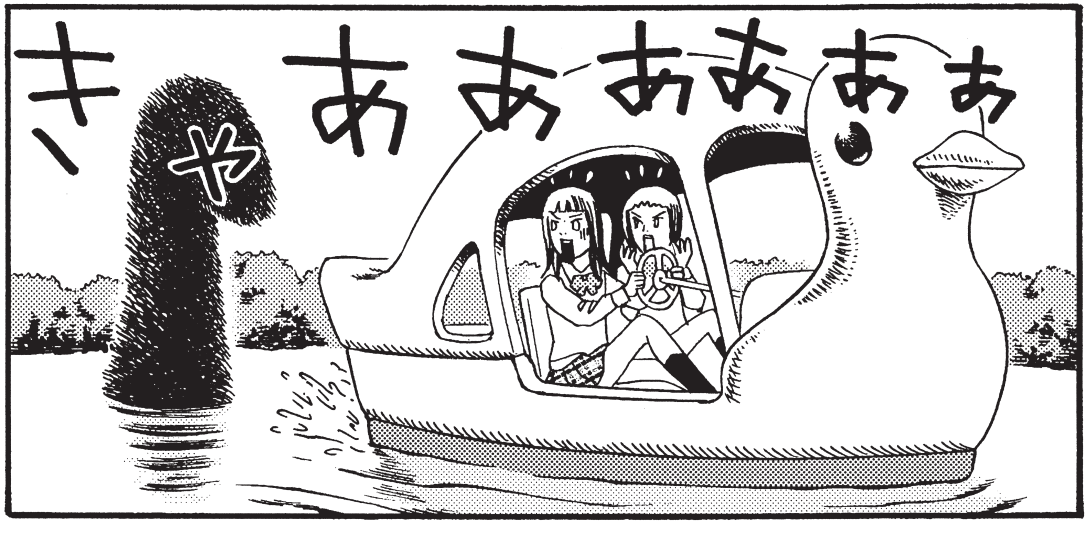
——ということは。

信憑性が高いのかもしれない。
廉太郎は中大岡の横に出て小型のＤＶＤモニターを見た。
――うぅむ。
ここで――遅ればせながらそろそろ状況説明をしておかなければなるまい。察しの良い方は大方察している頃なのだろうが、そうでもない方は何が何だか判るまいし、とはいえ別に改めて説明しなくたっていいようなどーでもいい状況ではあるのだが。
ちなみにここまで説明を引っ張ったことに大きな意味はない。誰かが得をする訳でもないし、それが伏線になっている訳でもない。かといって考えていなかった訳でもない。
廉太郎のいる場所は、再三告げている通り島根県である。おいこら島根というだけでは漠然としているではないか――というご指摘はご尤もである。
詳しく述べよう。
島根県内のとある湖畔の建物である。
島根県で湖とくれば宍道湖である。まあ宍道湖だろう。廉太郎も訪れるまで現場はてっきり宍道湖なのだと、そう思い込んでいた。だから廉太郎はせいぜいワカサギでも喰って玉造温泉でのんびりしようと考えていたのだ。
何故ならば、宍道湖だろうが琵琶湖だろうがどうせそんな怪獣はいないからである。ネス湖はもちろん、オカナガン湖にもシャンプレーン湖にもなぁんにもいなかったのだから。縦んば何かいたとしたって、廉太郎に捕獲などできる訳もないのだし。
宍道湖だったら――差し詰め怪獣の名前は『シンジー』ということになるだろうか。
もしシンジーだったら何となく流行りそうかもなあ――と、廉太郎はぼんやりとだが思っていたりした程である。もし暴れたりした場合は『怒りシンジー』とか書いちゃおうかな、などと、くっだらないことまで考えていたものである。ああくだらない。
リメイクされていなければカットされていたネタである。この辺は判る人だけ判れば良いのだが。
しかし、生憎ＵＭＡが目撃されたのは宍道湖ではなかった。宍道湖の近くの――正確にはそんなに近くもない――知られざる湖だったのである。市販の地図では確認することすら難しい。当然観光地ではない。何にもない。最寄りの町も栄えていない。その寂れた町の、町外れから更にかなり離れた、僻処というならこの上ない僻処の湖である。湖というより沼である。いや濁った池だった。それを知ったのは島根に入ってからのことである。

湖は、その名を『陣台湖』という。
偉そうだけどふざけた名ではないか。
島根県在住の人だって、滅多に行きはしないという。用がないからである。先祖伝来三百年から島根に住んでいる筋金入り島根県人のご老人だって、ほウそんな所あったかいなと言う程に知られていない場所である。だからコンビニもバス停もない。
そういう意味では日本に残された数少ない秘境ではある。もちろんワカサギなんか釣れないし近くに温泉も湧いていなかった。
到着して――廉太郎は愕然とした。
たしかに何もない。しかし、絵にもならない。余計なモノがないだけでなく、肝心なモノもなかったのである。どっから見てもただの田舎の溜め池である。神秘のしの字も怪奇のかの字もない。ひたすらぼーっとしている。情けない程に日本の片田舎ど真ン中命中である。陣台湖の風景は、そう言う意味での期待は裏切らないものだった。湖畔には安っぽいプレハブが建っていて、湖面にはアヒルとカエルの顔がついた足漕ぎボートが二艘、ぷっかぷかと浮かんでいた。
廉太郎と有美子と中大岡が現在いる場所はといえば、そのプレハブの中なのである。
プレハブは無人で、中には訳の解らない土産物が埃にまみれて放置してあった。主に木刀だの通行手形だの健康踏み竹だの、どっこででも手に入る馬鹿なモノである。それらは錆の浮いたワゴンにただ放り込んであり、それぞれ黄ばんで脱色した紙にこ汚い字で金額だけが書き殴ってある。横には牛乳パックを切った箱が置いてあり、マジックで『お金ここよ』と記されている。
入るなり中大岡は、宿は玉造温泉で一番高い高級旅館にしてくれ椎塚君――と言った。そして有美子の返事を待たずに、帰りの飛行機はファーストクラスね――と大声で言ったのだった。
――てめえの仕込みじゃねーのか？
その時は、いかに気弱な廉太郎といえども少しはムカついたのだった。気弱だから黙っていたが。
窓からは間抜けなアヒルの顔が覗いていた。繋いでいないので結構真ん中の方まで流されていた。
大盛望――目撃者は約束通りの時間に訪れた。
一同は土間に捨てるように置かれていたパイプ椅子をなんとか広げて座り、のらりくらりと成り行きのまま取材が始まったのだった。
それが、何を隠そう冒頭の場面なのである。何と長い状況説明か。

――そして。
話は半端なところに戻る。
有美子がノブに手を掛けた時――。
扉が勝手にすうっと開いた。大石遥を伴った大盛望が立っていたのだった。
い・た・よッ♥――と望は言った。
失礼致しますッ――と遥は言った。
出で立ちはそう変わらないのだが、遥はまあたしかに望のように際立って可愛らしい娘という訳ではなかった。しかし、じゃあたまげる程可愛くないのかというと、そんなこともなく、じゃあ可愛いのかと尋かれると困るのだが、まあ、そんなような顔である。こういった凡庸なキャラクターを活写できるようになれば、小説にもきっと深みが出るんだろうなあ――などと廉太郎は思ったものである。
そんな娘である。
但し。遥は際立って賢く見えた。実は普通なのだろうが、望と比べると凡庸な容姿をカバーしてあまりある程、やけに賢く見えるのだった。それはつまり望が際立って馬鹿っぽいということなのだが。そう思うと廉太郎はどうにも遣り切れなくなった。
そして遥は、望などより遥かに的確かつ簡潔に目撃状況を説明した。
ひと月前のことであるという。
夏休みの半ば過ぎあたりだろうか。
遥と望は共にこの陣台湖の傍にある寂れた町の出身であるらしい。ふたりとも米子あたりの全寮制の高校に通っているらしいが、夏休みで帰省していたのだそうだ。
退屈だしィ――と望が言って、ふたりは陣台湖に来た。そして足漕ぎのアヒルボートに乗り込んだ。
ボートはもう四半世紀近く放置されており、湖畔の空き缶に三十円入れれば乗って良いことになっているのだそうである。老朽化しているだろうし、子供が悪戯したりしては危険ではないのかとも思うのだが、そういうことを指摘する者すら、この湖にはいない。悪戯をする子供もいない。
と言うか、人っ子ひとりいない。
犬の子一匹、蚤の子一匹いない。
そんな訳で、誰も乗らないのであるから、そうした心配は無用なのであった。
くだらないしねー、と望は言った。
遥もくだらないと思ったのだそうだ。予想通り全然面白くなかったという。なら乗らなければ良さそうなものではあるのだが。

ただ三十円は出費しておりますし――。
遥は三十円のために精一杯ペダルを踏んだのだそうだ。それはもう必死で漕いだらしい。
何故なら。
望は乗るだけは乗ったが、まったく漕ごうとしなかったのだそうで――それについて望は、
疲れるしー。
と、弁明している。
弁明かそれは。
丁度、湖の真ん中あたりまでボートを漕ぎ進めたその時。急に陽が翳ったのだという。
夕方になったからだよー、と望は言った。
身も蓋もない。
そして、どこからともなく吹いて来た生暖かい風が、すうっと少女達の頬を撫でた。
夏だったから冷たい風とかあんまり吹かないと思うしー、と望は言った。
身も蓋も、もう容器すらない。まあ、それはそうなんだろうけど。
そして。
対岸で、がさがさという不穏な物音がしたのだそうである。
見ると――。



「御覧の通り対岸には葦が群生しております。発着基地より出航致しまして、湖の中心部まで進攻致しました時点で、自分は対岸より発せられる不審な音声をキャッチするに至ったのであります。咄嗟に危機を察知し、確認致しましたところ、自分は群生する葦の背後より巨大な未確認物体が出現する様を目視するに至ったのでありますッ」
「ありますって――そう緊張しないでもいいよ。まるで兵隊さんみたいだよ、遥ちゃん」
「自分は平素よりこうでありますッ」
「そうなの？」
「そうみたいってゆうかァ――望、この娘に興味ないしィ」
「君らホントに友達か？」
「自分は友人関係にあると認識しておりますッ」
「話の腰を折るな赤垣。そこで君は――この――ビデョを撮影したのか」
「それは違うのでありますッ」
「違うのかね？」
「自分は、確認不能の敵の急襲を受けるに至り、やにわに狼狽致しまして、必死にペダルを漕いだのであります。しかし御存じかとも思いますがあの足漕ぎボートと申しますのは――」
遥は立ち上がった。そして太股の辺りをパンと叩いた。
「――自転車のペダルなどより遥かに抵抗が大きいのでありますッ。日頃の鍛錬を怠っております所為か、口惜しいかな思うようにスピードが出せず一方その未確認物体は思いのほか進行速度が速く」
「おう」
凡庸な外見だけで判断することは出来ない。この娘――キャラは結構立っているようである。
「斜め左後方から追撃を受けるに至りまして、我がヒョコ丸は――」
「ヒョコ丸？」
「当艦の名称であります」
「と、当艦？　ああアヒルの――」
ヒョコだったらしい。
遥は窓の外を指差した。
「御覧の通り船尾に一部破損を来すという予想外の被害を受け、自分はよりいっそうの危機感を覚えまして湖岸に向け更に力を込めて艦を漕ぎ進め」
「すんごいちっからぁ。ほら。遥、太股パンパンだし。望、脚太くなるの嫌だし」
こいつら本当に友達なのか。
危機一髪でヒョコ丸は岸に着いた。

「民間人である自分は攻撃する手段を持ちませんもので、この戦局では退避するより選択肢がなかったのであります」
「で――さっきもゆったけどォ。この娘走って逃げてぇ。転んだのォ。ばかー」
望は声を立てて笑った。
「フ、不覚であります」
「それで」
「一目散であります」
「遥マジ超速かったよォ。なんかァ、ぴゅうって感じ。もう、望、困っちゃう」
それは相当に古くないか。
中大岡はまだ首を傾げている。
有美子が尋いた。
「それでさ。この映像は何なのよ。いったい、いつ撮ったのよ？」
「はい。このまま敗退したのでは日本国女子学生としての一分が立つまいと深く恥じ入りまして、雪辱を果たすべく、後日撮影致しましたッ」
「ご、後日？」
「そうであります。自分は翌日より同時刻に当陣台湖湖畔に待機、未確認生物の攻撃に対処するべく、まずはターゲットを分析せんと――」
「はあ」
廉太郎はモニターを見る。
中大岡はもう、何度も何度も再生している。
「しっかし信じられん」
中大岡は繰り返した。廉太郎は思う。インチキやガセネタにまみれているとはいえ彼は専門家なのである。こうしたものは通常の人間の数十倍数百倍見ているはずなのだ。実際まるで信用できぬ男ではあるのだが、それなりの見解は持っているだろう。
「そんなに――信じられませんか」
「ああ。こんな田舎に携帯用ＤＶＤ再生機やＨＤカメラがあるなんて痛ッ」
有美子は中大岡の後頭部をスリッパで叩いた。
「あのね。遥ちゃん。じゃあこの映像は偶々撮ったのじゃなくて、待ち伏せて、狙って撮影したものなの？」
「そうでありますッ」
「と、いうことは、これは待ってさえいれば今日も出る――の？」
有美子が神妙な顔をした。遥は、再びそうでありますッと元気に返事をした。
「そうかあ。なんか――状況が変わったって感じだわよねェ。これ、もしかして本物じゃない？」

廉太郎もそう思う。
モニターには水面から長い首を突き出した異様なモノが湖面を進んで行く様が映し出されている。惜しむらくは必ずしも撮影条件が良かったとはいえなかったようで、被写体は残念ながら真っ黒でディテールまでは判らない。夕方なのか。ただ望の言う通り、魚などでないことだけは確実である。
どう見ても本物である。
つまりこれは結構凄いことになったということなのではないか。間抜け企画が一転して大ネタに化けたのだ。それはつまり。
――困った。
それはこの化け物を廉太郎が捕獲しなくてはならなくなった――ということでもあるのだ。
そんな無体な。
「ぼ、僕は嫌です。こ、こんな怪物、どうやって捕まえるんです！」
「なァにほざいてるのよ。あんた、マフィアだの軍隊相手に孤高に戦いを挑む都会の野獣じゃなかったの？」
「そりゃ小説で。しかもここ田舎だし」
「甘えるんじゃないわよ」
いや、甘えてはいないが。
「そ、そんなこと言いますけどね、椎塚さんさっきまで乗り気じゃなかったじゃないですか。何をいきなり」
有美子は不敵に笑った。
「あんた。廉ちゃん。いい？　あんたが怪獣捕まえてみなさいな」
「みなさいなってできませんよ」
「だから捕まえてみなさいな。そして小説に書いてみなさいな」
「みなさいなってだから」
「これは事件でしょ。評判になるでしょ。スポーツ新聞一面トップでしょ？　本物だったら学会だって大騒ぎでしょ？　世界中が沸くでしょ！　小説は売れるでしょ！　掲載誌は大増刷でしょ！　すぐに単行本化して発売忽ち重版出来でしょ！　世界中に翻訳されて、テレビラジオインターネットに引っ張りだこで、メディア総なめ親の総取りってな具合でしょうが！　あたしだって社長賞貰って――」
「捕らぬ狸のですよ」
「捕るのは怪獣」
「だから。これって――そうだ。この映像をテレビ局に売った方が儲かるんじゃないですか、中大岡さん？」

「うーむ。それは私も考えていたのだ。その方が少なくとも私は儲かる。ううん、小説誌なんかに持ち込むんじゃなかったなァ。なんたって予算が違うしなあ。出版業界は社員の給料だけ良くって実は渋ちんだからなあ。社員も保身と出世ばかり考えておるから、企業としては先行投資も何もせん。プライドだけは高いが経済効果は低いという、狭ーい業種だわい。くっそう、先にこのビデヨを見ていれば、もっと上手く立ち回ったものを」
「今さらナニをほざくかこのタラコ唇。あんたの企画書はもう弊社が買ったんだからな。テレビなんかに渡せるか。テレビ業界こそ、クオリティという言葉の意味も知らないくせに、それでいて自分達は偉い凄いと思い込んで疑わず、ひたすら他業種を見下げるばかりの無能な連中の巣窟じゃないのよ。金は捻り出せるかもしれないけど、行き当たりばったりのその場凌ぎでしょ」
「クオリテエが低かろうともその場凌ぎであろうとも、金は出るからいいのだ」
「へん。渡さないったら渡さないのよ。大体ね、先に現地取材をしないで楽して儲けようなんて考えるからこういう目に遭うのよッ」
「おねーさんS入ってるよね」
「黙れ小娘！」
「待ってくださいよ」
廉太郎は立ち上がった。
「捕まえろ捕まえろって、口で言うのは簡単ですけどね、いったいどうやって捕まえるっていうんです？　装備は何もないんですよ。ただ来たんですから。僕が持っているものといえばパソコンとデジカメくらいです。後は着替えのパンツくらいしか持ってない。パンツで怪獣は捕まえられんですよ。自衛隊くらい呼んでくださいよ」
「駄目よ」
「駄目って」
「廉ちゃん。このプロジェクトはたった今から秘密になったの。極秘よ。警察だろうが軍隊だろうが教えちゃ駄目。いい？　そこの女子学生どももいいわね？」
「機密漏洩は万死に値する訳ですねッ」
「よくわかんなーい」
「でもなあ」
廉太郎はもう一度DVDを再生した。
「これ――どのくらいの大きさ？」
「でっかいのー」
「あー」

「水面から頭頂部と思われる部分までは、およそ一メーター三十から五十程の高さと思われます。水中にどれ程の部分が隠れているのかは、現状においては不明であります」
「ああ。でかいよなあ」
　それなら、全長何メーターあるか知れたものではない。
　例えば非常に温厚な牛がいたとしよう。で、その牛を素手で捕獲しろといわれて、はいと捕まえられるかと言えば、やはり無理だと廉太郎は思う。どんなに温厚な牛でも、扱いを知らねばその場から動かすこともできまい。
　廉太郎は酷く落ち込んだ。
「まあ落ち着くがいい赤垣」
　今度は中大岡が立ち上がる。
「私を嘗めてはいかんぞ。忘れておらんか？　私はアドバイザーだよ。何の手立てもなく乗り込んで来る訳があるまい。ちゃあんと手は打ってある」
「手？」
「そうだ。もうすぐここに捕獲用設備の設置業者と捕獲名人がやって来ることになっておるのだ」
「か」
　怪獣の捕獲名人。いるのかそんなもの。
「それより――」
　中大岡はモニターを示した。
「――彼らが到着するまでに、この怪獣の正体を見極めておかねばなるまいぞ。そっちの娘さんの言葉じゃないが、敵が何なのか知っておかねば策も練れないからな。ネッシーもね、一般には首長竜みたいに思われているが、諸説あるのだ。巨大なイカだとかナメクジだとか――」
　それは廉太郎も知っている。
　中大岡の言う通り、いわゆるネス湖の怪物は一般的には三畳紀からジュラ紀にかけて棲息していた大型爬虫類のプレシオサウルス、あるいはその亜種とされることが多い。要は恐竜（正確にはプレシオサウルスは首長竜であり、分類上は恐竜ではないのだけれど）である。
　しかし一方で、巨大ウナギであるとかエンボロメリ目の大型有尾両生類の新種であるとか、海豹などの海生哺乳類であるとか、諸説紛々である。
　捕まらないのだから無理もない。
「このビデヨに映っている怪物も、同じような形ではあるよな。ほら、有名な『外科医の写真』と似ているじゃないか」
「ありゃ作り物だった訳でしょう」

「そうだが」
「有名だけどインチキですよ」
「ふん。ありゃインチキだがこりゃ本物だろう。動いておるもの。小さくもないわ。ううん。おい見ろ。これは角か？　耳かな？」
「耳でしょう」
　大きな声がした。
　振り返ると、入口に入り切らない程のデカイ面が笑っていた。廉太郎は思わず飛び退いた。素で吃驚したのだ。
　凄く大きな顔だったのである。
　顔は、喋った。
「初代ゴジラにも耳があったでぃす」
「お、お前はッ」
　続いて有美子が身構える。
「か、片岡ァーッ」
「なんだ椎塚君。君は彼を知っておるのか？」
「し、知りたくッて知った訳じゃないわよッ」
「そりゃあつまり、知っておるっつうことじゃないか。なら話は早い。おい片岡君。入れるか？　君んとこは代々顔が馬鹿デカイんだから。まったく太るにも程があるぞ」
　顔面は入口に詰まったまま答えた。
「ちょっときついですなあ。やあやあやあ、これはこれは椎塚さん。ご・ぶ・さ・た」
「だまれ肥満ヲタク！　オノレがなんでこんなところに！」
　どうやらこの肥満男と有美子は浅からぬ因縁があるようである。そのうえ、この男はオタクの人であるらしい。
「やあやあやあ。ウチャリ山の一件では楽しませて戴きましたっけねえ。おや？　椎塚さんはもう痩せたようですね。僕は今でも、太ってまーす」
「え、永遠に太ってるだろうお前は。頼むから遥か遠く、世界の片隅で人知れず太ってよッ！」
　青筋を立てる有美子を無視して、男は入口からカラダを捩じ込ませるようにして侵入し、廉太郎に歩み寄ると、こんにちは片岡太でぃす、と軽やかに言った。
「やあやあやあ、お宅さんは作家の赤垣廉太郎さんですねぃ。いやあ感激だなあ。読みましたよ『新宿もぐらたたき』。出合い頭、ここにサインしてくださあい」
　片岡は腹を突き出した。中大岡がその腹を叩く。
「サインは後だ。それより片岡君、捕獲の準備はいいのかね」

「僕自身が入れれば、機材も資材も搬入可能ということでぃす」
「ちょっとォ。ねえ、まさかこの太り男が捕獲名人だとか言うんじゃないでしょうね中大岡さんッ。こいつは不眠不休でアニソン歌い狂ったりしちゃうような男なのよ。行かずに済むなら便所も行きたくないって程に無精者なのよッ」
よく知ってるなあと中大岡は感心した。
「むふぅ。いやだなあ。椎塚さん。僕は業者ですよう。名人な訳ないじゃないですかァ。僕、こう見えても片岡建設怪獣捕獲設備課課長なんでぃす」
「か、怪獣捕獲課ァ？」
「結構テレビとかやってるんですよぅ。需要はあるんですからァ。ほら、水中の檻だとか」
「ああ。現地に放置して来て顰蹙買ったりしてるのは、ありゃああんたの仕業ね」
そうでーぃす、と陽気なでぶは片手を挙げた。
望がそれを見て、
「かわいいでぶ♡かわいいでぶ♡」
と叫んで喜んだ。
「ところで名人は？」
「わ・し」
衰えた声。

有美子は急に表情をなくし、脱力したかのようにすうっと、棒立ちになった。
片岡は無言で笑っている。
中大岡も黙ってしまった。
女子学生も静かになった。
そのまま、不自然な沈黙が三十秒は続いただろうか。廉太郎は急に不安に襲われて、入口に駆け寄り外を見た。
丸いものが見えた。
その丸いものが、近づくやいなや、やにわに廉太郎に飛びついた。
「ぎょわわわわあっっ」
「わ・し」
「な」
まだらに日焼けした肉塊に黒い縦筋が十数本。その不気味な肉質が蛇腹のように縮んで、にゅう、と眉毛が八の字になった。
「南極先生！」
南極夏彦五十六歳。通称簾禿げ。後頭部に僅かに残った頭髪を簾の如く額に垂らした人気最低の五流推理作家である。
「ハゲかわいー♡ハゲかわいー♡」
望が騒いだ。

「おい」
「はい」
「どうして――オノレがいる」
「それは呼ばれて来たのだがなあ。椎ちゃんこそこんなところで奇遇じゃないか」
「何が奇遇だ土偶みたいな顔し腐って！　おい、南極。なんだって？　あんた、何の名人だって？」
「怪獣捕獲♬」
ナメさらすなァーッという雄叫びを上げて、有美子は南極の胸倉を掴んだ。
「アタシはあんたの担当よ。厭だけど。いい？　もう何年も担当やって、辛くって嫌で吐き気がして婚期まで逃してるのよアタシはッ。腐れ縁よッ。でもね、あんたが何かの名人だなんて話は今の今まで聞いたことがないわよ。あんたはナンにも出来なくッて、何ひとつまともにできるものがないから、あんなシジミが脚気になったような小説書いてるんじゃなかったの？　え？」
「く、苦しいぞ椎ちゃん。そりゃ君の認識不足じゃないか。わ、わしは」
「認識不足だとぉ」
「まあまあ椎塚君。そう興奮せんで。化粧が剝げるぞ。素肌じゃ女子高生に敵わんゾ」

「う、うるさい心霊写真。丸で囲むぞ！」
「鎮まれってばさ。この南極さんはね、以前ヒバゴンを捕まえた実績があるのだッ」
「ヒバゴン？」
有美子は南極を放した。南極は落下し、床に当たって弾んだ。
「ヒバゴンって、あの」
「そうだ。広島県比婆郡――現在の庄原市に出没するといわれている、幻の獣人だな。池田湖のイッシー、屈斜路湖のクッシー、本栖湖のモッシーと並ぶ、日本の有名UMAのひとつだよ」
どれもそうなのだが、もう少しマシなネーミングはできないものだろうかと思う。モッシーはないだろうに。
それはそれとして。
ヒバゴンは70年代に話題になった野人タイプのUMAである。目撃ポイントはたしか広島、鳥取、島根の県境あたりの山岳地帯のはずで、ならば意外にここから近い。それにしても捕獲されたという話は聞かない。少なくとも廉太郎は知らない。
「ヒバゴンってのは捕まったんですか？」
「わしが捕まえたのね。二十二年前に」
「で？」
「逃がしたのね」
それは捕まえたというのか。
きゃっちあんどりりーす、と南極は言った。
「そんな顔をするな赤垣。この人は一度は捕まえておるんだから、大したものだよ。何といっても世界中のUMA研究家が何十年も私財を擲ち必死になってかかっても一頭も捕まらんのだから」
いないからではないのか。
「本当なのか南極」
「わしを疑うのか椎ちゃん？　長いつき合いではないか。悲しいのう虚しいのう」
「ああハゲが泣いてるゥ。いけないんだ。おねーさんハゲ泣かしちゃった。やーいやーい」
望はそう言ってぴょんぴょん跳ねた。
「あ――ああ鬱陶しいッ」
有美子は南極をポカリと殴った。
「なんでわしを」
「泣くからよッ。で？　あんたそのヒバゴンをどうやって捕まえた訳？」
「わしはこの近くの出身なんだよう」
「そういえばそうだったわね。で？」
「惚れた女がおってな。おい、何を」
有美子が拳を振り上げている。

「話を逸らすなッ」
「逸れてないわい。惚れた女を待ち伏せしとったのよ。その日こそモノにしようと」
「モノ？」
「そうじゃあ。当時のわしは、ウブで一途な青年でなァ。しかしその娘はわしには見向きもせなんだのだ。わし、若禿げだったからのう。そのうえ歯槽膿漏だったし。ワキガは今でも治らんし。今は加えて加齢臭がな、ほれ。痛たタッ」
「なんということをするんじゃッ。おい、殺してやったっていいんだぞ南極ッ。鼻が腐り落ちるわよ。大体あんた二十二年前だって三十四じゃないか。なにが青年よ！」
「青年じゃろう。大体齢のことは言えないだろうよ椎ちゃ――おお許してくれい。二度と齢のことは言わんて。二度とな。だからさァ。ともかくシャイなわしはひたすら思い詰めてのう。結局投網を――」
「と・あ・み？」
「そうじゃ。わしはこう見えても以前漁師をしとったことがあるのんよ。宍道湖でワカサギ捕らせたら右に出るものはおらんかった。人呼んで『宍道湖の鮫』と」
スカン。
今回の有美子の凶器はアルミの灰皿だった。
「なんでそうなるか。ワカサギってのは投網で捕るのか？　よく知らないけどあんたが言うとなんか違うように思うわよ。それになんでワカサギ捕る男が鮫なのよッ」
「そりゃわしの本名の」
「本名？　鮫島とかだっけ？」
「本名は山・田」
「じゃあなんで」
「山田鮫太郎というんだよう。うへへへ。いやあ幾つになっても本名を言うと照れるのう。うっひっひ」
「羞らうな簾禿げ。薄汚くてみっともないわよ。もういいから。で――鮫太郎だから宍道湖鮫？」
「そう」
くっだらねぇ――と言って有美子は灰皿を放った。
かんからかーんと音がした。
南極は眼を閉じて上を向いた。
「懐かしいのう。すべては昔の話じゃあ。わしはなぁ、それで、その娘をな――ううん。おやあ、若やいだ香りがしておるが――おおふと見れば娘さんが居る。おう。想い出の娘によく似ておるわい。お嬢さん、お名前は？」

「望でーす。よろぴくね♥」
「の・ぞ・みか。うううん」
「ううんって――おい、こんなところで止せ！」
「違うわい。わしはきばっておるのではなく、想いを馳せておるのじゃあ」
「お餅が爆ぜているようにしか見えないわよ。ナニじーんとしてるんだこの蟯虫は。あんまり考えたくないけどさ、その、あんたの昔惚れてた女がこの娘に似てるっての？」
「似ておるわい。可憐にして清楚、眼許も口許も瓜ふたつじゃ。その彼女はなぁ、この湖の、ほうれ、あっち側の山の斜面、あそこの、とある村に住んでおったのじゃ。馬喰の娘でな。まあ可愛げな」
「バクロウ？」
「馬飼っておったのよ。峠を越える旅人を乗せるのね。知らんか？」
　江戸時代みたいな話に聞こえるが、高々二十年前である。とっくにアポロは月に行っている時代だ。
「そ、そんなものがいたの？　もしか、この地方特有の文化な訳？」
「いやぁ、そんなことはなかろ。この辺りでも、もう一軒だけしかなかったしのぅ。でも電車や自動車と違って馬ァエコじゃよ。ロハスじゃよ」

　南極は言い訳でもするように言った。
「糞はボタボタ垂れよるがのう」
「まーいーでしょ。ところであんた。その、投網で女掬ってどうしようとしたのよ。まさかレイプでもしようとしたんじゃないでしょうね？　それじゃあどっかの好色作家みたいじゃない？」
　吉良光太郎のことだろう。
「めめめ、滅相もないわい。わしは投網で彼女の自由を奪ってな、それで、わしがしたためた愛のポエムを渡そうと――」
「なんで詩を渡すのに投網なのよ！」
「だってェ、口も利いて貰えんかったしィ」
　南極は身を捩って羞らった。
「きゃあハゲ可愛い」
「そうかのう。わし、それでな、彼女の実家の山に行ってね。木の上に――」
　簾禿げはワゴンの上に載った。
「――こう、登っての。そこでな、こうして構えてずっと待っとった」
「ほら、ほらほら椎塚君。赤垣も見ろ！　何か名人っぽい腰つきじゃないか」
　中大岡はそう言ったが、廉太郎にはへっぴり腰のちびっ子禿げにしか見えない。

　しかし中大岡は真顔で続きを尋いた。
「それで？」
「それで――そうじゃなあ。あれは、夜の八時くらいかのう。彼女が来たと」
「そこで、網をかけたと」
「そう。こうしゃああっとな。すると」
「すると？」
「毛深かったわい。熊かと思うた。しかし猿じゃった。しかもこの片岡君くらいある大猿でなぁ。驚いたのう。吃驚したのう。たまげたのう。ゴリラかと思った程じゃ」
「そんなのと――彼女間違えるか普通？」
「似ておったのよ。夜目には」
　どんな女だったのか。
　中大岡は幾度も頷いた。
「間違いないですな。先日もお話しした通り、それはヒバゴンですよ、ヒバゴン。こう頭の鉢が逆三角になっておったでしょう」
「さてなあ。わし、ポエム渡すのに必死だったからのう」
「渡したの？」
「渡したが」
「なんでよ」

「だって」
「だってじゃないわよ。猿だったんでしょう」
「猿だったんじゃあ。まあ、よく解らんが若気の至りじゃろうな。気が逸っておったのだ」
「何が若気よ。若禿げだったんだろうが。意味不明の行動をとらないでよ。猿と判ってどーして詩を渡す？」
「さて？」
　南極は首を傾げた。
　廉太郎は松平編集長を思い出す。
　雪男の牝――そういう愛もこの世にはあるのかもしれない。理解したくはないが。それに、編集長の場合ただの夢想だが、南極の場合は実践を伴っている。もしかしたらそのままゴールインというようなこともあるのかもしれない。
――ヒバゴンの嫁。
　南極は恐妻家だと聞いているし。
――も、もしかしたら。
　廉太郎は花嫁衣装を着た大型類人猿を思い描く。
――いやあ、それは。
「な、南極先生、その、ヒバゴン――いや、ヒバゴン嬢は、それからどうされました？」
　廉太郎は恐る恐る尋いた。

「どうしたって――暫くぼーっとしとったがな。わしの顔を見て。まあ猿だし。字も読めんし。で、その後、ぽりぽり頭を掻いてな。立ち小便をして山へ帰って行ったわい」
「立ちション？」
「立ちション。雄だもの」
「お――オス」
　そういう愛も――いやそれは。
「猿が去った後、わしはハッと我に返ってのう。所期の目的を思い出して、急いで娘の家に行ってみたんだが、なんとモヌケのカラじゃった」
「留守だった？」
「いや、どこかに夜逃げしたんじゃろうなあ」
「夜逃げ？」
「馬に乗る者がおらんかったのだろうて。近代化の犠牲となってその娘の家は一家離散だ。だからこの話はな、わしの心の奥深くに仕舞われた、宝石のような、悲しゅうて美しい想い出なのじゃあ」
「どこが美しいんだ。それは美しいと言う言葉に対する冒瀆だろうが。おい。オス猿にポエム渡してさぞ楽しかったんだろうなオノレはッ！」
「いやあ、どちらかというと――」
　せつなかったかのうと言って、南極は照れた。
　どうにも摑みにくい性格である。
「て、照れてどうするかッ。オノレは、頭の中にブレーリードッグが巣でも作っておるんかいッ」
　有美子はそう叫んだ後、倒れるようにして椅子に沈んだ。そしてどっぷりと倦み疲れた顔を廉太郎に向けた。
「廉ちゃん。あたしさ、またどうでもよくなって来ちゃった。何か悪い夢見てたみたいな気がする」
　そう。悪い夢だ。
　この展開は廉太郎にとっては好都合である。
「そうでしょう椎塚さん。これは文芸編集者のあなたの仕事じゃない。もちろん冒険小説家の僕の仕事でもないんです。作家にそんなことやらせたって上手く行く訳ないんですよ。ネタが本物なら尚更じゃないですか。だからこの人達に任せて、僕らは傍観していましょうよ。あなたもお金さえ貰えるならそれでいいんでしょう？　中大岡さん？」
「あの、わしも作家なんだけど」
「ああ。任せて貰っても構わないぞ。私は専門家なんだから。その代わり契約通りのアドバイス料と必要経費は請求するよ。それから今晩は玉造温泉で豪遊だ。それを約束してくれるなら、君達は見てるだけでいい。ただ赤垣、記録小説だけは書けよ」

「あの、わしは」
「そうねえ。うちの雑誌だって今更引く訳にも行かないし、本当に捕獲できれば、さっき言ったようにメリットは大きいの。それに馬鹿編集長もご執心だし、ギャラは約束通り出すわ。だから――」
「あの、わ・し」
「――だからあなた達三人でもって怪獣を生け捕りにして。私達は作家と編集者としてその生け捕りの一部始終を取材――」
「わ・し」
「あああ鬱陶しい禿げねッ！」
「だって椎ちゃん、わしも作家」
「誰が作家か。このサッカリン男。あんたみたいに頭の作りが雑な作家はこの世にいないのよ。黙ってなさいよ。纏まりそうな話がまた纏まらなくなるだろうが。どうせ牛ガエルのケツの疣みたいな小説しか書けないんだから、オノレなんかはどーでもいいのよ。そもそも名人とか煽てられて調子に乗って好きでのこのこやって来たんだろうが。だったらおとなしく怪獣捕れ。これを機会に作家やめろ」
「非道じゃのう。でもなあ」
　南極は禿げ頭をぺしぺしと叩いた。
「投網は得意じゃが――捕れるかのう」
「いやいや、投網じゃあ捕れまいなあ。相手は大きい。でも心配は要らんのだ。この、片岡君の開発した新兵器を使うといい」
　中大岡は片岡を見た。
「新兵器――があるんですか？」
　片岡はチャウチャウのような顔をくしゃくしゃに歪めて笑った。
「任せてくださいよぅ。僕は自宅に特撮のビデオを三千二十六本も持ってるんですから。円谷英二のサインだって持ってるし。科学特捜隊の頃の二瓶正也もびっくり仰天の、対ＵＭＡ新兵器をね、ご用意しましたぁ」
　何だか心配である。
　中大岡はポマードで固めて盛り上げて照り返っている髪の毛を撫でながら、自信たっぷりに言った。
「ほら見たまえ。その新兵器と、この生け捕り名人がいれば、もう怖いものはなかろう。ＵＭＡ何するものゾ！」
　とてつもなく心配である。
　片岡の造った新兵器と南極の名人。これではミミズだって捕獲出来まい。
　名人が誰に言うとなく言った。
「そのな、ＵＭＡつうのは何じゃろか？」

「そりゃ未知動物だよ」
「そりゃ、やはりＵＦＯみたく、ユーマと発音するんかな？　それともユー・エム・エーと読むのかのう？」
　それはどうなのだろう。廉太郎はしかしＵＦＯをユーフォーと発音する外国人を知らない。海外では皆ユー・エフ・オーと言うように思う。もしかしてユーフォーと発音するのは日本人だけなのではないか――と廉太郎は疑っている。もしそうなら、それはＨ系ホモ風味同人誌のような名前のプロデューサーや、焼きソバや、ピンク・レディーの影響なのだろうか。
「♪ＵＦＯ」
　片岡が頭の上に手を翳してそう言った。
　しかし残念ながら有美子がパイプ椅子を振り上げたので、それから先の歌舞を見ることは出来なかった。よく動く肥満の踊りは少しだけ見たい気がしたのだが。
　読み方なんてどうでもいいだろう――と中大岡が仕切り直すように言った。
「まあそうだがのう。何の略なんじゃ？」
「え？　そ、それも関係ないことだ」
　中大岡は、知らないのだろう。
Unidentified Mysterious Animal だろうか。
「ちっちっち」
　片岡が人差し指を立てて割って入った。
「ウルトラマン・エース」
「ええい煩瑣いこの夏の肉まんッ！」
　有美子は鉄拳を繰り出したが、敏捷な肥満オタクは身をくねらせ、肉をだぶつかせて避けた。
「キモヲタジャーンプ！」
　着地と同時にふるふると脂肪が揺れた。
「きゃあでぶ凄い」
　望が跳ねる。片岡は肉に埋もれた細い眼でそんな望を見て、
「ふんッ。僕を誘惑しようったって駄目ですよ。僕は立体的な女の子には興味がないのさぁ。君がアニメ化されたらつき合ってあげてもいいけどねッ」
　と、誇らしげに言った。
　ほう、片岡君は顔が平たいのが好みか、変わっておるのう――と南極が感心した。望は、頬を膨らませた。
「ナニ言ってるのかわかんなーい。ぶう」
「そんなことよりその、怪獣の出没する時間は何時頃なのだね？　えーとそこの」
　遥が気をつけの姿勢で答える。

「ハッ。一八三〇前後でありますッ」
「六時半と言うことか。ええと、おう、もう間もなくではないか。片岡君。兵器の準備を」
「♪モンスター」
　片岡はどうやらピンク・レディーが気に入ってしまったようだ。歌いながら太い指を器用に動かし、何かを組み立て始めた。
「♪カメ～レオーン」
「歌うなよ固太り。黙って働け」
「アーミー♪」
　齢が知れるというものである。望ですらぽかんとしている。尤も彼女の生まれる前の曲である。
　歌がネタと全然リンクしなくなって、ついには渚のシンドバッドになってしまった頃、プレハブの土間には異様な物体が組み上げられていた。
「ああッ」
「どうした」
「ここで組み立てちゃっちゃ外に出せないなあ。しくじったなあ」
「今さら何を言うのだ片岡君。それより、これはなんだ。何なんだ？」
「人間大砲ですね」
「は？」
「だ・か・ら。ここに、この南極先生を入れて、怪獣目がけてどん」
「わ・し？」
　嗚呼。
　ぷつり。
　有美子が切れた音だ。何度目だろう。
「おいこら。この脂肪率100％の贅肉魔人。んなモンのどこが秘密兵器なんだッ！」
「今まで秘密に」
「おいッ」
　蹴り。
「何するんです椎塚さん！　これ造るのに六百万もかかってるんですよう。特にこのウルトラ警備隊のマーク入りの外装」
「んなもんに金かけてどうするかい。おい片岡。お前、朝青龍の尻みたいな顔しやがって。顔面にマワシつけてみろよ。絶対似合うぞ」
「いやーん」
「いやーんじゃないわい。いちいち説明しなきゃオノレのセリフと思わないだろうがこの愛犬用バラ肉詰め合わせ福袋がッ。大体、こんな簾禿げをぶっつけて怪獣が捕まるか？　そんな、お笑い番組じゃないんだから――」

「鋭いなー」
「な、何が」
「これ、元々はバラエティ番組用なんですよぅ」
「ほ、本当にお笑いだったのか」
「お笑い番組馬鹿にしちゃいけませんよ。一発芸人やアホなタレント出してお茶濁してるように思われがちですが、とんでもないですよ。スタジオセットにはお金かかってますからね。大道具小道具持ち道具着ぐるみ、バラエティはそうゆうもんに人一倍予算をかけるもんなんですから」
「だ、誰も馬鹿になんかしてないわいッ」
　廉太郎は知っている。有美子が各局のお笑い番組を録り溜めしておいて、週に一度、深夜に続け観しているということを。ちなみに有美子のマンションの住民達は、その日を『悪魔が笑う日』と呼び、恐れ戦いているらしい。
「も、問題は効果があるのかということよッ。バラエティの大道具は実戦に使えんだろが」
　片岡はちょっと身体を傾けた。
「うーん、でも効果ないとは思えないけどなあ」
　その仕種が、いわゆる小首を傾げるという仕種だと廉太郎は暫くしてから気づいた。片岡には、小首がないのである。

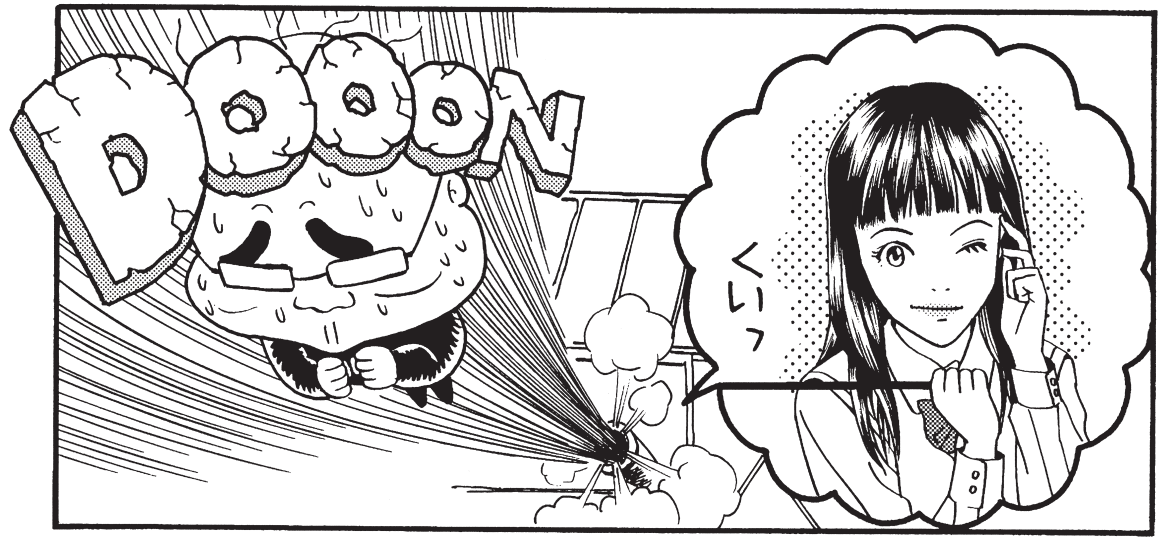
「いいですかぁ、まず、南極先生の寸胴に特大の投網をつけてこれで発射するんですね。すると、まあ先に人間がついている訳だから、目標に当たった場合こう、しがみついて貰えるし」
「なる程。人間誘導ミサイルなわけね。若干の誤差は弾頭自体が修正するんだ」
　有美子は考えを改めたらしい。
「そうそう。後は網が絡んで」
「わし、弾？」
「でも――大丈夫これ？」
「まあ危険は危険ですよ。何たって火薬で発射する訳だし。でもほら、外側の造りを見て貰えば判りますけど、頑丈です。撃つ方は安心ですね。暴発とかは絶対しませんし」
「か、火薬なのかのう？」
「それは大砲ですからねえ。火薬ですね」
「おい片岡君。組み立てちゃって外に出せんというのなら、この窓から撃てんのかね？」
「窓？　ああそれはいい。ここの窓から撃ちましょうねえ。どおんと」
「わし、その、痛くない？」
「どーんと行けどーんとな。おい。だが片岡君。室内では危なくないか？」

「撃つ方は安心だって言ってるじゃないですか。たとえ何があったって、発射する方は絶対に安全ですよぅ。操作も簡単。南極先生をこの穴から込めるだけ。後はここから覗いて、照準を定めて、ほらこの引き鉄を引くだけ。やってみます？」
「あの、わし」
「わーわー望がやるー。ねーねーホントにハゲ飛ぶのォ？　残酷う。死んじゃうゥ」
「自分も――す、少し希望するのであります。実弾でないのが残念であります」
「ほら聞いたか。何だかんだいっても彼女達も子供なんだな。撃ちたいってさあ、あっはっは。無邪気なものだ、なあ赤垣」
　中大岡は笑った。
　そういう問題なのか。
　ちょっと違うように思うが。
　それに、これは、この装置はもしかして、もしかしなくとも、非常に危険なモノだと廉太郎は思うのだが、いかがなものだろうか。
　下手をすると命にかかわるのではあるまいか。いや、上手く発射されたって行き着く先には怪獣がいるのだ。その場合、その怪獣が肉食でないと言い切れるだろうか。

「その、みなさん、もしUMAが肉食の凶暴なヤツだった場合――その場合は」
　廉太郎は南極の禿げ頭を見て小声でそう呟いた。
　片岡は大いに肉を震わせた。
「そう！　いいところに気がつきました。敵が肉食だった場合、こりゃもうベストな捕獲道具になる訳でぃす。だって、生き餌が飛んで来たようなものでしょう？　釣りですよ。釣り。フィッシング」
「わし、餌？」
「釣りってそんな――いいんですか椎塚さん！　このままで！」
　しかし有美子は遠くを見ていた。
「喰ってくれるケダモノがいるだけ良かったと思った方がいいのよ。きっとそうよ。これはね、天の配剤。あんたみたいな役立たずにも僅かな利用法があったということなのよ。未知の動物の栄養になるなんて素晴らしいことじゃないの。あのおっかない奥さんもきっと喜んでくれると思うわ」
「そ、そうかのう」
「絶対に喜ぶわよ。うんざりしてたもの」
「そうかのう。何か複雑な心境じゃなあ」
「往生際が大事よ」
「い、嫌なんだが」

「さようなら。南極夏彦」
「さ？　さよう？　さようって」
有美子は南極の両肩をガッシと掴んだ。
「さ、よ、う、な、ら、よ！」
「はい。さようなら」
この押しに、大抵の作家は負けるのである。
南極は下唇を突き出してやや消沈し、自分からすごすごと片岡の準備した全身タイツに着替えた。
悟ったか。
悟ったのか南極。
廉太郎の胸中が、南極への哀悼の意で満ちそうになったその時。どういう訳か双眼鏡で窓の外を監視していたらしい遥が叫んだ。
「もッ、目標発見！　西北西対岸！」
「何ッ。それっ弾を込めろ！」
「投網を弾に装着して」
「どこを触るんじゃ」
「行け宍道湖鮫！」
「わあ厭だよう」
「望が撃つゥ」
「わ・しは」
「それ♥」
ドン。

5



腹に響く音がして、火薬の臭いがした。
打ち上げ花火のようなひゅるひゅるいう音と、腸チフスの海豹が石抱きの刑に処されて喘いでいるような悲鳴が、見事な不協和音を奏でたまま徐々に遠ざかった。
廉太郎は眼を閉じる。
——冥福を。
ぱかっ。
——ぱか？　ぱかって？
金属バットでスイカを打ち返したような軽やかな打撃音が遠方でしたかと思うと、腸捻転の海象が三角木馬に跨がって呻いているような悲鳴が、今度は徐々に近づいて来た。
廉太郎は眼を開ける。
窓から血だらけの南極が帰還した。
「ほげー」
「何がほげーだ。なんで帰って来た！」
「ほれもう一度込めるのだッ！」
「きゃあ望が撃つぅ」
どん。

ひゅるひゅるぱかっ。
廉太郎は咄嗟に窓際に逃げた。
どさ。ぼきばし。
「んがぺー」
表記の難しい悲鳴である。
南極は再び帰還し中大岡に激突した。
今度は特大投網が部屋の中で開いた。
「うわあああああなんじゃあこりゃあ」
「おいこら名人、離れろッ。あんた何で帰って来るんだッ。おい。気絶するなよッ。投網が開いて絡んじゃってるじゃないかッ。おい南極ッ。わ、私は怪獣ではなく怪獣研究家だああ取れないッ」
「何なのよ。アタシを巻き添えにしないでよ」
「こ、こら椎塚君、無理に動くな余計に絡む」
「うひょう、何かと思ったら、こりゃあ南極先生の亡骸だあ。気色悪いなあ。ええいッ」
「ウわっ。こっちに投げるな片岡ッ」
「馬鹿、トスしてどうする椎塚君。あの親爺から投網を外さにゃどうにもならんぞうもももッ」
「あれ、すいません教授ゥ。圧死してますか？　だって椎塚さんが押すんですよぅ」
「仕方ないじゃないよ。遥ちゃんが潰れちゃうじゃないよこの人間エアバッグめッ」

「こ、これは負け戦でありますかッ」
「勝敗の問題じゃないわよ既に何？　何これ？」
「それは僕の右足の親指ですって。靴が脱げて」
「げー触っちゃった触っちゃったわよ」
「えんがちょー。きったなーい♥」
「じ、自分は口惜しいでありますッ。そして苦しいであります。おげえ」
「か、片岡、頼むからこれ以上太らないでえ」
「ひ、人は成長するものですからねい」
「萎縮しろ。つうか消滅しろッ」
「育ち盛りなんですよ。ほれ、もりもりもり」
「やァだ。ちょっとくっつかないでよ」
「僕だって厭ですよゥ。さっきも言いましたが僕は三次元の女は。しかも年増は痛ッ痛ッ」
「あああ汗臭いッ」
「よしてください椎塚さん僕は善良なアニメファンで痛ッ痛ッいたいッ。特撮も好きだけどうひょひょ擽ったい。あ、この小娘何をするぅ」
「れ、霊障だッ。先祖の祟りだッ」
「ああもう、太らないでッ。肉触りが」
「きゃあ面白い面白い。エイッエイッ」
「痛い痛い。何するんだこの馬鹿娘ッ」
「でぶーでぶー。ボよんボよん」

もう、何というか。
「あ、て、敵がこちらに向かって来るのを目視」
「何だと！」
「ま、まづいぢゃないかぁ。食べられちゃうよう」
「た、食べるのあれ」
「食べるだろうよ。あ、おい赤垣。見ればお前だけ無事じゃないかッ」
まあ、逃げたから。
「こらッ。なに傍観しておるか。ぼおっとしてないで何とかしろ。お前、暴力で難局を乗り切るのが得意なんじゃないのかッ」
難局というより、南極なのだが。
生憎、鋏もカッターもない。デジカメとパンツで網は切れない。仕方がないので廉太郎は土産物の木刀を手にした。役に立つとも思えないが。
怪獣が迫っている。
とりあえず。
素振りした。
「こ、この役立たずッ。振ってどうするかッ」
「め、面目無い」
気が弱いのだから。ロリコン気味だし。
「そうだ。廉ちゃん。その木刀で南極を叩いて！」
「な、何でです？」

「こいつはね。ぶてば蘇るの。網の元が解ければ何とかなるでしょ。アタシは、このでぶが邪魔で身動きが、ああ気味が悪いこの肉感」
廉太郎は恐る恐る南極に近づき、木刀を振り上げた。上げたはいいが怖けづいてしまった。
意気地なしなのだ。やむを得ず眼を瞑って、スイカ割りの要領でそろりと木刀を振り下ろした。
ぼくッ。
「何をする赤垣イッ」
中大岡だった。
——もう一度。
リベーンジ。
どかッ。
「㊗#★ん。いつもと違う刺激じゃあ」
有美子の予測は当たった。
「おい南極。この、網を」
「@%はアオじゃ」
「何を口走ってるんだ。網を外せ。怪獣が来るじゃないか。こ、殺されるぞ」
「アオじゃ。あの蹴りはアオじゃ」
「どうした。打ちどころが悪かったのか」
この親爺に関していえば、打って悪いところというのはないのではあるまいか。

「そうじゃないわい。あれはな、皆の衆。怪獣なんかじゃないぞ。アオじゃ」
「アオってなによッ」
「だからさっき話したじゃろうて。わしの惚れておった娘の家――」
「バクロウか？」
「そうじゃ。アオは、いつも彼女の傍にいた。わしがモーションをかける度、後ろ脚でパカーン、パカーンと景気よくなァ」
「う、後ろ脚？」
「左様。あの蹄の感触。間違いない。美しい、青春の甘酸っぱい痛みじゃあ」
「それじゃあ――」
廉太郎は窓に駆け寄り湖を見た。
黒い、
首の長い、
耳のある、
大きな、
「う、馬だ」
「ううう馬だとぉ！」
馬が。
水面をのんびりと。
嘶きが聞こえた。

「可哀想にのう。一家離散して、置いてけ堀を喰ったのじゃなあ。まあ、たしかにウマ連れで夜逃げは難しかろう。一頭だけ取り残されて、野生化したんじゃなあ。野良馬じゃ。それにしても馬ちゅうのは二十年も生きるもんかのう。それに。馬って泳げるんか？」
「ち、違います。背が立っている。この湖は浅いんですよ。だから、あれは要するに単なる、う、馬の水浴び――」
「なる程。この陣台湖は歩いて渡れるからのう」
「そ、そんな――」
ブチブチと音を立てて網を引き千切り、烈火の如き形相の中大岡が立ち上がった。
「おぉのぉれぇ小癪な小娘ェ、この中大岡百太郎を謀ったなぁッッ！」
今度はスパッと網が鋭く切り裂かれて、大盛望がぴょんと飛び出た。
カッターを持っていたらしい。
「ふーんだ。望、騙してなんかないしー。だって望ってば、最初っからはっきりと言ってるもん。あれは、U・M・A――」
「ウ・マ」
南極がぽん、と膝を打った。

「なる程ウマと読むのかこりゃウマいッ痛いッ」
手刀が駄洒落の息の根を止めた。
どうやら最後に南極を殴るためだけに、有美子は網から抜けたようである。
「あー面白かった♥」
大盛望は天使のように笑った。